平城宮内裏北外郭出土の絵馬資料

はじめに　ここに紹介する絵馬資料は、1963年の平城宮第13次調査において、平城宮内裏北外郭東区西北隅の土坑SK820から出土したものである。保存処理に関わる未報告木製品の再調査の過程で、絵馬の転用品であることが判明した。

出土遺構　SK820は、一辺3.8m、深さ1.7mの方形の土坑で、埋土下部には1800点を超える木簡をはじめとして、多量の土器、瓦、木製品を含み、検出状況から短期間に廃棄物を投棄し埋め戻したものと理解された（『平城報告Ⅶ』1976、『平城宮木簡一』1969）。

出土木簡には、紀年木簡が73点あり、養老2年（718）から天平19年（747）までのものを含む。天平19年の調物の荷札を含まないことから、土坑の埋没年代は同年を大きく隔たらない時期と考えられている。

絵馬資料　絵馬資料は、長さ27.3cm、幅2.5cm、厚さ4㎜をはかるヒノキの柾目板である（図1）。片面に、幅1㎜程の繊細な墨線で、絵柄が描かれている。彩色は確認できない。本来方形であった板を裁断し、1側縁の中央よりわずかにはずれたところに、深さ9㎜程の三角形状の切り込みをいれる。転用後の用途は不明である。

絵馬の復原　平城京から出土した奈良時代の絵馬として著名なものに、二条大路出土の絵馬がある。左京二条二坊五坪に接する二条大路上に掘削された3条の塵芥処理用の溝のうち、北東側の溝SD5300から、1989年に行われた第204次調査で出土したものである（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995）。

絵馬は、長さ27.2cm、幅19.6cm、厚さ6～9㎜のヒノキの柾目板に、墨で飾馬の側面全身像を描いたもので、馬は右向き、左（画面奥）の前後肢をあげる（図2－1）。背には鞍がのり、障泥、轡、面繋、手綱、胸繋、尻繋、壺鐙などの馬装を表現する。馬体は赤色のベンガラ、障泥は白色土で彩色し、さらに斑状の模様を描く。年輪年代測定から728年以降に伐採された木材を用いたものであるとされ、伴出した紀年木簡は天平8年（736）に集中し、同年を下限とする。

二条大路絵馬に描かれた絵柄をもとに、SK820出土木製品の墨線をたどると、馬体を左右対称に反転することにより、本来の姿を読みとることができる。

すなわち、墨線は左から、馬の右前肢の膝、および折り曲げた蹄踵、胸前、左前肢の上膊から前膊、（壺鐙）、腹、右後肢の脛から飛節、左後肢の脛から飛端にかけて、および尾毛に相当する。二条大路絵馬をもとに復原したものが、図2－2である。

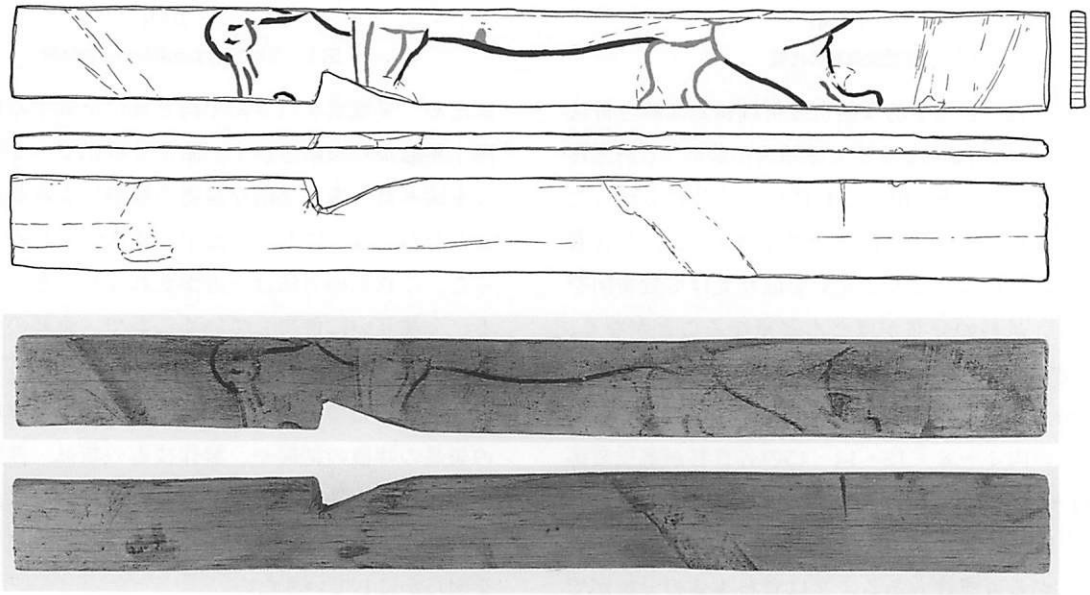

図1　平城宮内裏北外郭SK820出土絵馬資料（1：2）

共通点と相違点　二条大路絵馬は、それまで発見されていた絵馬に比べ、格段に大きいことがその特徴とされた。本例と二条大路絵馬の板材の横寸法が、ほぼ一致することは注目してよい。その一方で、馬体はひとまわり小さく描かれている（比較の可能な前肢膝から後肢飛端までの値は、本例が18.0㎝、二条大路絵馬が19.7㎝である）。

裁断による残存部位からは、馬装のありかたを知ることはできないが、絵柄の共通点として、いずれも画面奥側の前後肢をそろえて上げる姿で描かれていることがあげられる。片側の前後肢を同時に動かす歩様は、「側対歩」とよばれ、古式の歩様として知られ、漢代から唐代にかけて図像表現に多用されたことも指摘されている（末崎真澄「古代の美術にみる馬の伝統的表現」『馬の博物館研究紀要』第1号 1987）。

反転によっても歩様表現の位置関係が保持されることや、手前前肢の太さと筋肉の表現に一致がみられる一方、奥前肢膝の表現や馬体の大きさの違いからは、背後にある描画法（紙型の使用、部分図の組合せ）の検討も課題となろう（『高松塚壁画の新研究』飛鳥資料館 1992）。

対面する絵馬　飛鳥・奈良時代から平安時代にかけての出土絵馬は、現時点で25例近くが知られているが、二条大路絵馬の発見以前に知られていた絵馬は、その多くが左向きのものであった。

古代末から中世における絵馬の用法として、『年中行事絵巻』『春日権現験記絵』『慕帰絵詞』『一遍聖絵』などの絵画資料に描かれた情景をもとに、2枚を1組とする用法の存在が指摘されている（岩井宏実『絵馬』 1974）。そこに描かれた絵馬は、牽馬図であったり、板上辺が山形であるなど絵馬自体の変質もうかがわれるが、二条大路絵馬が右向きである説明として、こうした用法を遡上させ、対面する一対であった可能性が指摘されている（金子裕之「絵馬と猿の絵皿」『環シナ海文化と古代日本』1990、同『平城京の精神生活』 1997）。

1994年の第259次調査において、平城宮造酒司の南面を東西に走る宮内道路の路肩に掘り込まれた土坑SK16738から、2枚の絵馬が出土した（『1995平城概報』）。描かれた馬は裸馬であり表現も素朴であるが、2枚1組で対面した絵柄を描く用例の存在を知ることができる（図2－3・4）。そして、左向きのものが右向きのものよりもひとまわり小さい。この土坑は、延暦3年（784）までの紀年木簡を含む道路側溝の埋土を切り込む。

二条大路絵馬の陰嚢の表現を重視すれば（佐原真『騎馬民族は来なかった』 1993）、雄を右向きに、雌をひとまわり小さく左向きに、雌雄一対に作ることが行われていた可能性はないだろうか。

（次山　淳／平城宮跡発掘調査部）

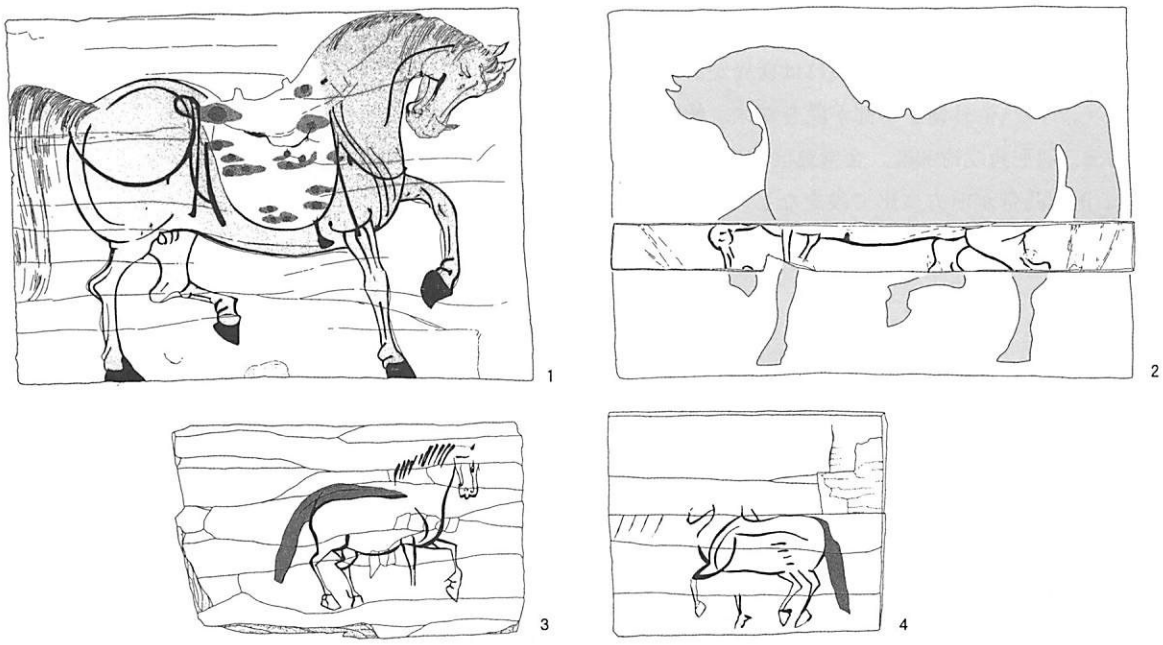

図2　平城宮・京出土の絵馬（1　二条大路SD5300　2　平城宮SK820　3・4　平城宮SK16738　1：4）